

# 再利用された中王国時代に起源をもつ テーベ西岸の岩窟墓について

アブデルアール・アハメド

## 要旨

E・ジョベック (Dziobek) は、イネニ墓 (TT 81) の発掘調査において、ネクロポリス・テーベにおける岩窟墓の中で、元来は中王国時代に造営された岩窟墓であったが、未完成のまま使用されずに残され、第18王朝前期に再利用された墓が存在していることを指摘した。本稿では新王国時代以降に再利用された中王国時代に起源を持つと考えられる岩窟墓を検討した。その中で中王国第11王朝に起源を持つ岩窟墓が存在していることが明らかになったが、一方では、それらの墓の起源が中王国時代ではなく第17王朝末期とする意見もあり、今後の検討が必要であることが判明している。

**キーワード：**ネクロポリス・テーベ、再利用、中王国時代、岩窟墓



第1図 ネクロポリス・テーベ

## はじめに

上エジプト第4ノモス (古代名ウアセト) のテーベ西岸には、新王国時代 (第18～20王朝：前1539～前1077年頃)<sup>(1)</sup>を中心とする多くの岩窟墓が存在しており、一般にネクロポリス・テーベの名で呼ばれている (第1図)。

フリーデリケ・カンプ (Friederike Kampp) によって、414基の登録墓に加えて、551基の未登録墓がリスト・アップされている (Kampp 1996)。これらの墓は、墓番号の両脇にハイフンをつけて表現され、例えば、Grab Nr. -239- (「カンプ番号239号」あるいは「カ

ンプ墓239号」) などと呼ばれる。これは登録墓の略号の例：TT 239、Theban Tomb No. 239 (テーベ岩窟墓239号) としばしば混同される。カンプが合計965基の岩窟墓をあげているが、本書の副題が示すように、新王国第18王朝から20王朝にかけての岩窟墓の概念の変化に関するものであるため、新王国時代以外の岩窟墓に関しては、しばしば平面プランさえも提示されていない場合が多い。

しかしながら、現在においても、このカンプの著書が、ネクロポリス・テーベの全容を把握する上では、最も有効なものであることも事実である。

ネクロポリス・テーベは、前述したように新王国時代

に大いに発展したが、それ以前の第2中間期・中王国時代・第1中間期・古王国時代にも、この地域には岩窟墓が造営されていた。

中でも、新王国時代の直前にあたる第2中間期と中王国時代の岩窟墓の構造や分布を検討することは、新王国時代のネクロポリスの展開と様相を考える上で非常に重要な要素となる。

本稿では、新王国時代以降に再利用された中王国時代に起源をもつと考えられる岩窟墓を検討することで、中王国時代に造営されていた岩窟墓の存在を明らかにすることを目的としている。

## 1. 先行研究

新王国時代のいくつかの岩窟墓が、中王国時代の岩窟墓を再利用して造営されていることを最初に指摘したのは、ドイツ考古学研究所のジョベックであった。ジョベックは、テーベ西岸の第18王朝の岩窟墓の保護と報告書の刊行を目的として、シェイク・アブド・アル＝クルナ地区に位置する第18王朝のイネニ墓（TT 81）の発掘調査を実施した。イネニ墓は、第18王朝のアメンヘテプ1世の治世（在位：前1514～前1494年頃）からトトメス3世の治世（在位：前1479～前1425年頃）に造営されたものであった。この墓に記された自伝には、イネニが、王家の谷・東谷のトトメス1世（在位：前14903～前1483年頃）の王墓やカルナク・アメン大神殿の中心の部分年建造したことなどが記されていた。ジョベックは、イネニ墓の調査で、この墓のプラン（第2図）が新王国第18王朝の他の墓と相違していることに気づいた。

イネニ墓の前庭部の奥には、長方形の底面をもつ6本の柱があり、こうした柱の構造が第11王朝初期の所謂

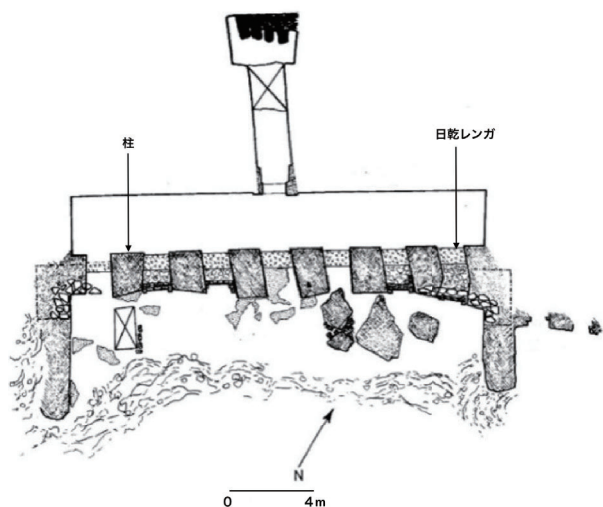
「サフ墓」の構造に類似している点をあげている。このイネニ墓の構造に関しては、ジョベックなどは第18王朝初期の岩窟墓が、中王国時代の岩窟墓を模倣して出来上がったものであるとした（Dziobek 1987: 79）。恐らく、その背景としては、アル＝ディール・アル＝バハリの第18王朝前期のハトシェプスト女王（在位：前1479～前1458年頃）が、第11王朝のメンチュヘテプ2世の神殿を模して彼女の葬祭殿を建造したのと同様に、新王国第18王朝時代の初期・前期の人々が、中王国時代の記念建造物にインスピレーションを得て、岩窟墓や神殿を建造したと推測できる。

ジョベックは、これら6本の柱の間に、日乾レンガ造の壁を築くことで、柱の間の隙間を塞いでいたことに注目し、6本の柱が最初に存在し、後にそれらの間の空間をレンガによって塞ぎ、上部に小窓を持つ構造に改変したことを明らかにした。このことから、イネニ墓が、中王国時代の墓を模倣して建造されたのではなく、中王国時代に造営された岩窟墓を第18王朝時代の前期に、再利用したものであると結論付けた。また、このイネニ墓（TT 81）の直後にセンエンムウト墓（TT 71）が、この影響を受けて小窓を持つ構造になったとしている（Dziobek 1987: 70）。

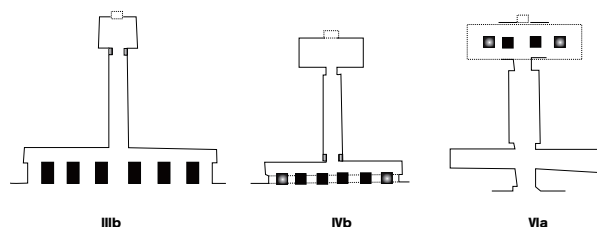
ジョベックは、中王国時代に起源をもつ岩窟墓として、TT 67、TT 83、TT 117、TT167などの岩窟墓も候補としてあげている。

カンブは、彼女の著書の中で、岩窟墓を平面プランのタイプに分類し、II～VIIのタイプに関してはさらにII a, II b, IIIa, IIIb, IVa, IVb, 2 Va, Vb, Vc, Vd, Ve, VIa, VIb, VIIa, VIIb, VIIcと細分している。これらのタイプの中でIIIbタイプ（TypeIIIb）が、イネニ墓（TT 81）に分類されるものである（第3図）。

また、カンブは、このタイプIIIbに関して第1表を示



第2図 イネニ墓（TT 81）の平面プラン



第3図 カンブのタイプIII b、IV b、Via

第1表 タイプIII bに分類される墓

| 年代    | 関連する岩窟墓                                                                                                          |
|-------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 中王国時代 | -9-, -20-, -76-, -107-, -282-, -288-, -349-, -351-, -425-, -427-, -428-, -488-, -549-, -550-, TT81, TT103, TT117 |

し、このタイプの岩窟墓の年代を中王国時代とし、カンブ番号墓14基を含む、合計17基を示している。登録墓は、TT 81、TT 103、TT 117の3基である。TT 103は、中王国第11王朝のダギ墓であり、TT 117も第11王朝時代の岩窟墓で、第3中間期に再利用されたものである（Kampp 1996: 19）。

しかしながら、ジョベックが中王国時代に起源をもつ岩窟墓の候補としているTT 67、TT 83、TT 167に関して（Dziobek 1987: 76~79）、カンブは、TT 67（ヘブウセネブ墓）をタイプVIaに分類し（Kampp 1996: 28）、その年代も被葬者でアメン大司祭のヘブウセネブの年代であるハトシェプスト／トトメス3世時代としており、再利用墓とはみなしていない。そして、トトメス3世治世初期のテーベ市長で宰相であったイアフメス墓（TT 83）は、タイプIVbに分類され（Kampp 1996: 21）、時期も第18王朝初期のイアフメス王（在位：前1539～前1515年頃）～トトメス3世時代としている。TT 167（被葬者名不詳）もまたタイプIVbに分類しており（Kampp 1996: 21）、墓の年代も第17王朝末期から第18王朝時代初期としている。このようにカンブは、これらの岩窟墓は、第17王朝末期から第18王朝前期の時期のものであるとしている（Kampp 1996: 21）。

## 2. 岩窟墓再利用の事例と比較

本稿では、以下に事例としてあげる岩窟墓が、中王国時代に造営され、新王国時代に再利用されているという共通点を持っていることについてふれる。そして、中王国時代に造営され、新王国時代には再利用されていない

ダギ墓と比較する。

### 2-1. ダギ墓（TT 103）（第4図）

カンブが、タイプIIIbに分類した17基の岩窟墓（第1表）の中で、3基の登録墓が含まれているが、新王国時代以降に再利用されたイネニ墓（TT 81）とネスアメン墓（TT 117）とともに記載されているのが、中王国第11王朝のテーベ市長で宰相であったダギの墓（TT 103）である。

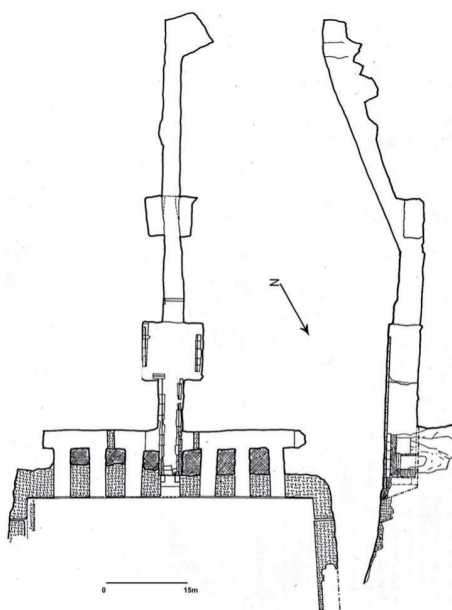
ダギ墓は、シェイク・アブド・アル＝クルナ地区にあり、第3図のような平面プランを持つ岩窟墓である。前庭部の奥に長方形の底面を持つ6本の柱がある構造をしている。この6本柱の構造は、前述したイネニ墓の構造に類似しているが、ダギ墓の場合は、柱の間を塞ぐ日乾レンガの壁体は存在していない。

### 2-2. TT 117（第5図）

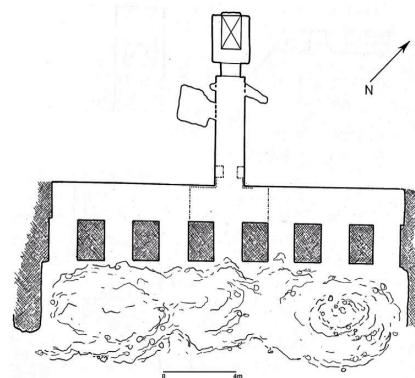
カンブが、イネニ墓（TT 81）、ダギ墓（TT 103）とともにタイプIIIbに分類している岩窟墓にTT 117がある（第4図）。被葬者の名前や称号は不詳であるが、墓内には第11王朝時代の壁画が部分的に残存している（Porter and Moss 1960: 233）。この岩窟墓を再利用した人物に関し、カンブは墓内部の碑文を検討し、第3中間期・第22王朝のジェドムウトイウエフアंकとした（Kampp 1996: 19）。

第4図に示すようにTT 117も、前庭部の奥に6本の柱を持つ構造をしている。墓入口から真っすぐに通路が伸びて、シャフト（堅坑）を持つ奥室が位置している。シャフトを持つ奥室構造は、中王国時代に良く使用されたものである（Dziobek 1987: 76）。

第11王朝時代の壁面装飾が残存していること、そして再利用された時期が新王国第18王朝時代ではないことなどから、この岩窟墓は、中王国時代に未完成のままの状



第4図 ダギ墓（TT 103）平面プラン



第5図 ジェドムウトイウエフアंक墓（TT 117）の平面プラン

態で放棄されていたものを再利用したものではなく、第11王朝時代に完成されていた岩窟墓を第3中間期・第22王朝時代に再利用した可能性も大であることを指摘しておく。

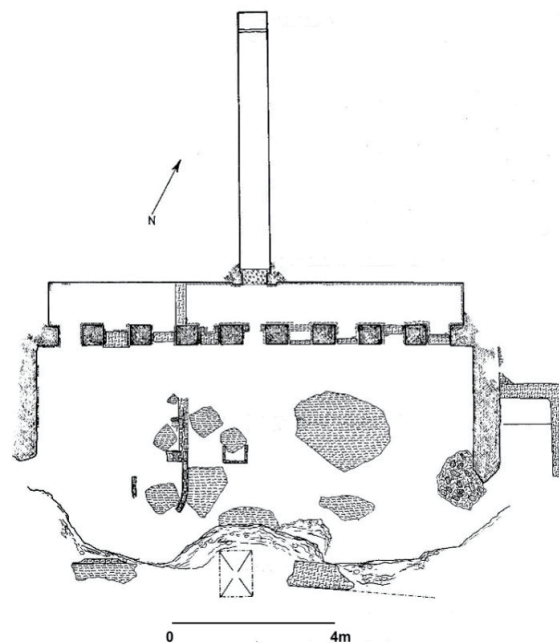
### 2-3. ヘプウセネブ墓 (TT 67) (第6図)

ジョベックが、中王国時代起源の岩窟墓を新王国時代に再利用した墓としているヘプウセネブ墓 (TT 67) に関して、カンブは、前述したように再利用墓としては考えていない。

第5図に示すようにヘプウセネブ墓 (TT 67) も前庭部の奥に6本の柱が位置しており、柱の間に礫を積んで泥プラスターで仕上げた痕跡が残存しており、イネニ墓 (TT 81) と同様に上部を窓のようにあけて使用していることなどを考えると第11王朝の岩窟墓を再利用したものであると言える。しかし通路や4本の柱を持つ奥室の構造などは、第18王朝時代の岩窟墓のプランに改変したことがうかがえる。

### 2-4. イアフメス墓 (TT 83) (第7図)

シェイク・アブド・アル＝クルナ地区に位置するトトメス3世治世初期のテーベ市長で宰相のイアフメス (アメチュウ) の墓 (TT 83) は、前庭部の奥に8本の柱を持つ構造である。これらの柱の間には日乾レンガで塞が



第7図 イアフメス墓 (TT 83) の平面プラン

れている。また、墓内部には直線的な通路が存在している。カンブは、この墓をタイプIVbに分類、時期を新王国第18王朝初期のイアフメス王 (在位：前1539～前1515年頃) ～トトメス3世 (在位：前1479～前1425年頃) 時代とした。

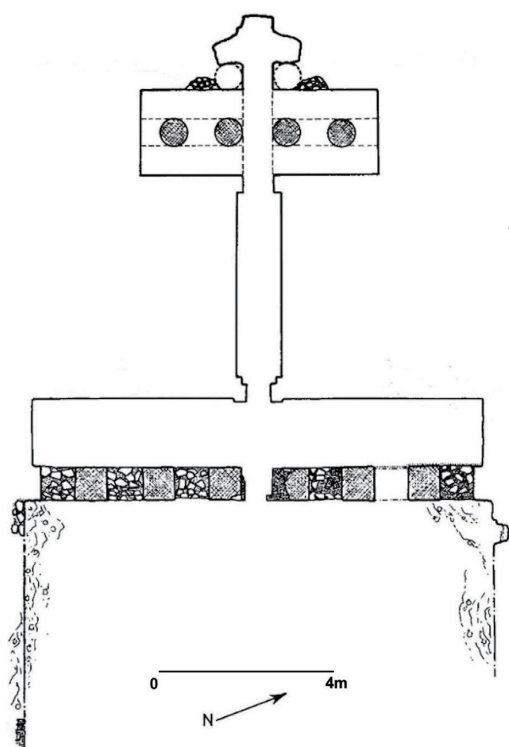
墓の被葬者であるイアフメス (アメチュウ) が、トトメス3世治世初期の人物であることを考えるとこの岩窟墓は、第18王朝初期に造営されたものをトトメス3世時代初期までに再利用されたものであると推定できる。

墓が造営された時代が、中王国第11王朝であるのか、第18王朝初期などであるのかは、今後の検討によるが、このプランを持つ墓がカンブが主張するように第18王朝初期であるとする積極的な理由もない。

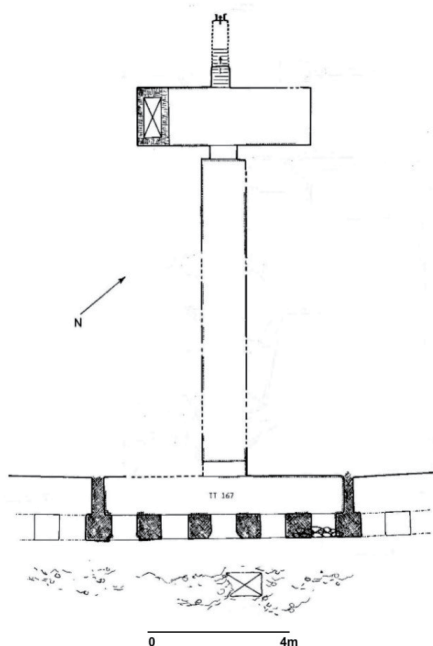
### 2-5. TT 167 (第8図)

前述したイアフメス (アメチュウ) 墓と同じく、カンブにより、タイプIVbに分類されている墓にTT 167がある。被葬者の名前は不詳であるが、カンブは、その時期を第17王朝末期～ハトシェプスト女王時代のものとしている。

前庭部の奥の柱は6本現存しているが、当初は8本の柱の構造にするよう計画されていたことが、平面プランからわかる。柱の間を塞いだ痕跡があるため、この岩窟墓もまた再利用と考えられるが、前述のイアフメス墓 (TT 83) と同じように元来の岩窟墓の起源が中王国時代なのか、第17王朝末期から初期のものなのかは現時点では不明である。



第6図 ヘプウセネブ墓 (TT 67) の平面プラン



第8図 名が不明な墓（TT 167）の平面プラン

## おわりに

新王国第18王朝、トトメス1世からハトシェプスト女王の治世において、中王国時代に起源を持つ岩窟墓の幾つかのものが再利用されていたことが確認できたが、今後の課題として、「サフ墓」と類似した前庭部の奥に柱を持つ構造の岩窟墓が、中王国第11王朝時代のものなのか、あるいは、同じ構造の岩窟墓が第17王朝末か18王朝初期まで造営されていたかをカンプの分類方法をいかして詳細に各岩窟墓を明らかにする必要がある。

## 謝辞

本稿の執筆にあたって、早稲田大学学術院指導教授・近藤二郎先生にご指導、早稲田大学文学研究科考古学コース博士後期課程・福田莉紗氏にご助力を賜った。深く御礼申し上げたい。

## 註

- (1) 本稿では、Hornung 2006: 491~495の編年年代表使用

## 引用文献

Dziobek, Eberhard 1987, “The Architectural Development of Theban Tombs in the Early Eighteenth Dynasty”, in Problems and Priorities in Egyptian Archaeology ed. by Jan Assmann, G. Burkard and V. Davies, KPI Ltd, London and New York, p69-80.

Kampp, F. 1996, *Die thebanische Nekropole zum Wandel des Grabgedankens von der XVIII. bis zur XX. Mainz am Rhein.*

Porter, B. and Moss, R. L. B. 1960. *Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic Texts, Reliefs and Paintings/1 : The Theban Necropolis/1 : Private Tombs, Oxford.*

## 図表出典一覧

第1図 Willock, S. 2011. p.9.をもとに筆者が作成

第2図 Kampp, F. 1996, p.325.をもとに筆者が作成

第3図 Kampp, F. 1996, p.19-20, p.28.をもとに筆者が作成

第4図 Kampp, F. 1996, p.377.をもとに筆者加筆

第5図 Kampp, F. 1996, p.405.をもとに筆者加筆

第6図 Kampp, F. 1996, p.291.をもとに筆者加筆

第7図 Kampp, F. 1996, p.333.をもとに筆者加筆

第8図 Kampp, F. 1996, p.457.をもとに筆者加筆

第1表 Kampp, F. 1996, *Die thebanische Nekropole*, 2, p.19.をもとに筆者加筆

